

洋書輸入協会会報

VOL. 7

NO. 10

(通巻78号) 昭和48年10月

理事会報告

9月10日(月)

(一) 7、8月分収支計算・予算対比表の検討。

財政的にきわめて苦しくなっているが、必要なところへは、他の部門から予算を融通して、事業に支障をおこさないようにする。

(二) 通関委員会報告——通関問題で大蔵省へ陳情したことについて。

(三) その他

9月26日(水)

(一) 通関問題について討議。

通関委員会で具体策を検討し、当局と接渉することとする。

(二) 洋書交換委員会報告——会場の関係および参加者数の問題で、本年は中止することとする。

(三) 文化厚生委員会報告——10月2日フランクフルト書籍展視察団31名が出発の予定。

(四) ダイレクトリー委員会報告。

近く1974年版の編集を開始する予定。

(五) その他。

文化厚生委員会だより

猛暑も峠を越し、9月の声を聞くといよいよ運動に快適な季節、ゴルフに魅せられた人々はじっとして居られないらしく、去る9月7日第5回72会コンペを企画した処、忽ち満員の盛況であった。真夏の間も絶えず腕を磨く事を怠らず、この日をと期する者12名、優勝は前日特訓の甲斐あって上杉氏に輝いた。

天城 G. C. に於ける 27 Holes S. P. の結果は下記の通りであった。

優勝 上 杉 (U P S) 45, 58, 47=150 (42) 108
準優勝 斎 藤 (U P S) 43, 39, 46=128 (19.5) 108.5
3 位 石 田 (丸 善) 45, 42, 46=133 (21) 112

幹事 村山(ゲーテ)記

理事会報告	1
文化厚生委員会だより	1
マルクスの周辺	2
Book Review	3

外国出版社の紹介	
Houghton Mifflin	5
Pitman	6
海外ニュース	5

ニュース	6
総代理店ご案内	7
会員の横顔(ミロブック・鈴木富夫)	7
広告 三洋出版貿易	8

マルクスの周辺

土 屋 保 男

カール・マルクスが『資本論』を書くためにかよいだした大英博物館の図書閲覧室をしめす写真に、よく、あのドーム型の広い円天井のある写真が挿入されている。しかし、この大閲覧室が北がわに建てられたのは、1854—57年であるから、1850年6月に入館許可証をもらってかよいだした閲覧室をしめすものとしては、不正確といわなければならないことは、ベデカーのロンドン案内書でもめくってみれば、すぐわかることで、ことごとしく言いたてるべきほどのことでもないであろう。

ライブチヒのレクラム文庫に収められているマルクスの生活記録 *Karl Marx Dokumente seines Lebens 1818 bis 1883* は、事実をもとにしてマルクスの生涯を追跡している記録としてはもっとも正確な、信頼のおけるものといえる。ところで、故郷バルメンへ帰るエンゲルスが、マルクスと再会した歴史的な場所は、マルクスの女婿ラファルグの証言をもとにして、パリ中北部東部のキャフェ・ド・ラ・レジャンスであるとされ、前記ドクメンテにも、1890年撮影のこのキャフェの写真が掲載されている。だが、1844年8月28日に両人が出会った当時、このキャフェは、テアトル・フランセ近くではなく、パレ・ロワイヤルの向かいがわにあって、パレ・ロワイヤル広場キャフェの名で知られており、レジャンスと改名したのは、1853年にパレ・ロワイヤル拡張のため、西がわに引っ越してのちのことであることは、ラルース大百科辞典のレジャンスの項からもわかるのであるから、厳密を期するなら、会見場所はやはりパレ・ロワイヤル広場キャフェとすべきである。

マルクスといえば、その幼時、のちのマルクス夫人とは隣り同士の幼なじみであったとする説は、こんにちでは誤りであることが明らかになっているが、それにしてもマルクス自身が夫人にあてた手紙

に、夫人が舞踏会の女王であった昔のローマ通りを思いだすよと書いていることから、夫人の家であるヴェストファーレン一家は、マルクスの家のすぐ近く、トリアー市門ホルタ・ニグラの反対がわのローマ通りにあったとする説が、トリアーの現戸籍・統計局長で、すぐれた実証研究家のモンツ博士によってとなえられたが、旧著『カール・マルクスとトリアー』の改訂増補版 *Karl Marx Grundlagen der Entwicklung zu Leben und Werk, Trier 1973* では、昔はヴェストファーレン家の住所だったノイ・ガッセをもローマ通りと呼んでいたので、市門反対がわに引っ越したとするのは、疑問で、そこは物置きかなにかではなかったかとされている。とすればマルクスは、同級生エトガルの姉であり、自分の姉の友だちでもあるのちのマルクス夫人の家をたずねるのに、町の反対がわのかなり遠い道（もっとも、ギムナジウムにほど近いが）を歩いたことになる。

マルクスとハイネが遠い親戚であることは、当時のユダヤ系のドイツ人がたいてい同族関係にあることから推定されていたが、マルクスのおじいさんの、そのまたおじいさんの父であるジーモン・プレスブルクが、ハイネのおじいさんの、おじいさんであることが、前掲モンツの書で立証されているのは興味ぶかい。

ヴェルナー・シューフェンハウアーの著書 *Feuerbach und der junge Marx, Berlin 1965* は、若きマルクスとフォイエルバッハの唯物論との関係を実証的に究明したものとして評価され、その邦訳もでているが（桑山政道訳、福村出版）・——ちなみに著者は、ライブチヒ・レクラム文庫のフォイエルバッハ書簡集の編者でもある——、その後1967年にアムステルダムの *International Review of Social History, Vol. XII* にザスの論文『マルクスではなくフォイエルバッハ。『シュトラウスとフォイエル

パッサの審判者としてのルター」なる論文の筆者について』がでて、右論文の筆者はマルクスではなくてフォイエルバッハであることが立証されたため、前記の著書の改訂第2版（1972年版）では、その点、かなりの改変を余儀なくされているが、なおすっきりした形にはなっていない。というのは、従来マルクスが唯物論者に転換した証拠としてあげられるのが、前掲『審判者としてのルター』なる論文であり、マル・エン全集でもれっきとしてマルクス論文として掲げられ、重要論文として解説されているからで、これがフォイエルバッハの論文だとわかった以上、マルクスの唯物論者への転換点は、別な視点からの解明を必要とすることになるからで、シェーフェンハウアーの小幅改訂ではとうてい全しとはいえない。

若きエンゲルスの『国民経済学批判大綱』は、1843年末ないし44年1月に執筆されたと推定されているが、1843年11月21日付のフレーベルあてのマルクスの手紙によれば、エンゲルスのこの論文がばらばらに同封されているとあるから、すでにこの時期

にエンゲルスはこの論文を書きあげていたとみるのが妥当であろう。

近ごろは、マルクスやエンゲルスの時代の著書や新聞雑誌がリプリントないしは再刊物として続々でているので、マルクスとエンゲルス以外の人たちの書いたものからも両人の活動を確かめることができるようになったし、当時の事実の調査もかなり地道にすすめられて、これまでの通説が改められだしていることは、たんに些末事のせんさくとして一笑に付するわけにはいかないことをしめしている。

来春から刊行される新しいマルクス・エンゲルス全集 MEGA が、両人とかわりをもった人たちの資料までもふくめて刊行されることは、いっそう厳密なマルクス・エンゲルス像を手に行けるという意味でも待望の壮図であるといえよう。

日本という国はありがたい国である。明治時代には洋書も多数輸入され、たんねんに探せば、案外いろいろほりだすことができるし、世界のどこの国の新刊でもいまでは2、3カ月もたてば入手できる。業界の功、また大なりというべし。（法政大学講師）

BOOK REVIEW No. 8

大学出版部——科学の発展のために——

G. R. ホウズ・箕輪成男訳

東京大学出版会 xiv, 293 pp. 1969年

¥400

この本は、To Advance Knowledge. A Handbook on American University Press Publishing by Gene R. Hawes, American University Press Service, Inc. 1967 の翻訳で、UP選書の一冊として出版されたそうである。オリジナルの出版が1967年、訳書の出版が1969年6月であるから、新刊書として紹介するわけにはいかないし、また当然のことながら、急速に発展し、変化しつつあるアメリカの大学出版部を主題としているだけに、あげられている数字はもとより、内容的にも古くなっている点がある。しかし、それにもかかわらず、本書はいまなおこのテーマについての唯一の本といえるし、われわれ洋書輸入業者にとって参考になる点が多いので、ここにとりあげることにした。

67の会員を有するアメリカ大学出版部協会の依頼によって本書を執筆した著者は大学出版部に働いた経験のあるひとであり、訳者は東京大学出版会の専務理事であるから、著者・訳者ともにこの本については人を得ているといえよう。それだけに、われわれには読み易い、理解し易い本となっている。

本書の読者対象として、アメリカ大学出版部協会会長・イエール大学出版局長チェスター・カーはその「序」のなかで、つぎのようにあげている。「一、現在、学術出版の世界に働いている人々や将来そこで働きたいと考えている人々。二、学者（中略）。三、大学の管理者層（中略）。四、出版部に助成

金を出す財団・個人・機関（中略）。五、その他、大学の一部門としても、出版産業の一部門としても大変小さくはあるが、不可欠の存在であるこの大学出版部がもっている新しい意義を理解しているすべての人々——たとえば図書館長、小売書店主、商業出版社、批評家およびアメリカの書籍出版界を代表するその他の人々。」(p. v) われわれはさしずめ五、に該当するのであろうか、「ニューヨーク大学出版部および多くの他の出版部にとって最大の海外市場は、面白いことに日本であり」(p. 230)、さらに「アメリカの学術書の大部分を刊行する役割を果たしている」「大規模ないし中規模の大学出版部は通常その年間総売上げ高の10ないし15パーセントを外国から稼いでいる」(p. 9) こと（なお、プリンストンとMITは25パーセントで最高、商業出版社の平均は10パーセント）からみて、われわれは平均的なアメリカ人、いや平均的なアメリカの小売書店主などよりももっと深い関係と関心とをアメリカの大学出版部に対してもっている、といえるであろう。

本書の構成はつぎのとおりである。「第一章 科学の発展と学術出版 第二章 大学出版部の歴史 第三章 大学出版部の業務——編集・製作・販売・経理 第四章 読者への道 第五章 学術出版の経済学」

第一章では、「最近数年、出版業界の中でもっとも速く成長しつづけると予測されてきた大学出版部」(p. 3) が、1966年において2,200万ドルの売上げ（1948年には417万ドル、1966年の全米書籍出版業界の年間売上げ高の推計22億ドル強の1パーセント）を有し、同年の新刊点数2,300は、アメリカ全体の小説を除く新刊27,000の8パーセント以上を占めるほどの活動をしてきたこと、さらに急速に成長をつづけていることが紹介され、大学出版部はどんな本を出し、出さないかが例をあげて説明されている。第二章では、オックスフォード大学出版部の起源から説きおこし、1787年創始のジョンズ・ホプキンスにはじまる歴史をのべ、その歴史の分析に基づく発展段階論がくりひろげられる。第三章はわれわれには関係がないようにみえるかもしれないが、いろいろ興味ある事実が述べられ、そういうことが、出版の質の高さを保証していることがよく理解できる。例えば、出版部は総長または副総長に直接責任を負うかたちで運営されている大学の一部局であることが通常であること、出版局長は一般には学科主任、または学部長と同じ待遇を、編集部長、学業部長といった幹部は正教授または助教授に比せられていること、大学当局から財政的援助をうけないで運営されている出版部は例外であること、等々。第四章は12節にわかれ、広告、宣伝、小売書店・海外への販売、バック・タイトル・ペーパーバックスの販売などがこまかに説明されている。ここでとくに羨しいと思うことは、図書館への販売が四分の一から二分の一以上に達しているということである。これと、「大学出版部にとって今日重要な存在であるが、また歴史的にも今日までつねに重要な存在であった」(p. 223)といわれる海外諸国の読者、および大学当局ならびに種々の財団による財政的援助が、大学出版部の出版活動を支えていることである。第五章は主として経理的な側面を扱っている。ここでは「商業出版社がまったく学術的な本を、なぜ刊行できないのか」(p. 237)、また大学出版部の出版はなぜ財政的援助を必要とするのかが数字をあげて説明されている。

これまで書いてきたことから、われわれ洋書輸入業者がこの本を読めば教えられる点が多いことはおわかりいただけたであろう。さきに述べたように7年前に出版されただけに数字が古すぎるのは当然である。また、この世界の変化・発展がはげしいので、いくつかの大学出版部でつくられていた IBEG (International Book Export Group) はおそらくこの本の刊行後間もなく解散している——その理由を推察させるような記述は見当らない——し、Henry M. Snyder という名前も消えてしまった。こういう時間的な経過から生ずる古い点はあるにしても、本書はやはりこのテーマについてのよい案内書といえよう。(I)

Houghton Mifflin Company (America)

110 Tremont Street, Boston
Mass. 02107, U. S. A

Houghton Mifflin の歴史、特にその源流を語るには、その前身である二つの会社を紹介しなければなりません。その一つは、1832年、John Allen と William D. Ticknor が Carter & Hendel という出版社兼書店を買収し、Ticknor & Fields Co. の名でその経営に乗り出した事で、これが後の Houghton Mifflin の前身の一つとなります。彼らの Office はボストン市中央の Crease Mansion にありましたが、この建物は現存し、ボストンでも最も古い建物の一つであります。流れの第二の発端は、これより20年後、ボストンの隣、ケンブリッジの町の Charles River という所で、青雲の志を抱いた若き Henry O'Houghton が、印刷と出版の事業を始めた事です。その後この二つの流れが一つになる訳ですが、前者は1850年代に至って可成りの成功をおさめ、当時の代表的文学作家達も、相当この社の出版物に名をつらねております。例えば、Longfellow, Saxe, Lowell, Hawthorne, Emerson, Thoreau, Howe, Taylor, Aldrich, Stowe, Twain 等々です。その後この Ticknor and Fields 社は創立者の子 Howard M. Ticknor より、そのパートナーの Osgood へと引き継がれましたが、この Osgood の積極性が禍いして、事業の拡大による資金難に見舞われ、1878年、ついに倒産、と同時に Henry O. Houghton により買収され、ここにその名も現在と同じ Houghton Mifflin Company が生まれました。この時すでに Atlantic Monthly が出版され、Riverside Press も傘下にあります。1895年には Mr. Houghton が、又1921年にはパートナーの Mr. Mifflin が死去し、その後の経営は、Henry A. Laughlin に引き継がれます。彼によってその端緒を開かれた教育部門出版は1900年代に入って大きく成長し、Houghton Mifflin の教育書と言えば、現在の米国の教育界で、欠く事の出来ないものとなっています。有名な数学の Modern School Mathematics に代表される教科書群、Audio Visual 関係の教育機器は、その Software 等は、一般書籍部門の隆盛と相まって、Houghton Mifflin を今や当代一流の教育出版社として世界の評価を受けております。

海外 ニュース

「メレディット社が教育部門を整理」

Meredith Corporation は、その教育部門の一つ Lyons & Carnahan を買却したが、残りの教育部門も、1973年度には\$990,000もの赤字が見込まれており、徐々に切り捨てて行く方針のようである。

年間約100点の教科書を出版して来た、シカゴの Lyons & Carnahan は、本年8月に、Rand McNally 社に売却された。メレディット社の教育部門には、まだニューヨークの Appleton-Century-Crofts とシカゴの Replogle Globes, Inc. が残っている。これらをどのようにして整理するかはまだ決定されていないが、いずれにせよメレディット社が教育部門の出版活動を停止することは確定的である。

同社の教育部門は過去3年間のうち黒字だったのは1年だけであった。この弱体部門を切り捨てて、同社の強い部門、メディアをダイレクター関係の

製品とサービスでの始動を強化して行く方針のようである。

(Publishers Weekly 1973年9月10日号より)

「アディソン・ウェズレーが 一般書市場に進出」

大学向教科書を専門に32年の歴史をもつ Addison-Wesley は、このところ大衆向一般書の部門を拡張してきている。中でも Muriel James と Dorothy Jongeward の “Born to Win: Transactional Analysis with Gestalt Experiments” はすでに250,000部を売っている。近刊予定の一般書には、例えば、Muriel James の “Born to Love: Transactional Analysis in the Church” (9月刊、\$5.95) や Dorothy Jongeward の “Affirmative Action for Women” (12月刊予定) などがあり、かなりの反響を呼ぶものと予想されている。

Addison-Wesley は創立当初から教科書出版社であり、特にサイエンスに重点を置いていた。次に学

Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd.

Pitman House, Parker St.,
Kingsway, London W. C. 2, England

この出版社の創立は1845年、社名は、創立者の名をそのまま社名とし、著名な創立者の名に相応しく出版、印刷、教育の三部門で活躍し、コングロマリットとして大きく成長を遂げて参りました。改めて言及するまでもなく、創立者は Pitman 式速記法の開発者であり、1837年に “Stenographic Sound Hand” という雑誌を創刊しております。現在でもアメリカ、フィリピン、日本を除く他の国々ではこの速記法が広く使われております。The Pitman Group の中の印刷部門では、創立者の孫にあたる Mr. Mark Pitman (昨年4月来日) が関連会社5社の統師として活躍し、又教育部門に当っては Mr. Mark Pitman の伯父にあたる Mr. Peter Pitman (3月来日) が、Pitman Central College, Pitmans Secretarial Training Centre, The Pitman School of English を初めとする11校を掌握しております。毎年 Cambridge や Oxford で開校される Pitman の Summer School には、日本から500人もの生徒が押掛け、ここでも日本は一番の得意先の様です。Peter は又大の日本のファンで、時々彼の口から流暢な日本語が飛び出し我々をびっくりさせます。

さて The Pitman Group の出版部門ですが、傘下8社を含めた可成の大世帯で、その主流はやはり Shorthand のテキストから始まって、Secretarial Training, Office Practice, English は勿論、他の Languages ですが総合出版社と言って良いと思います。ここで特筆したいのは、このグループの中に Pitman Medical があり、地味ですが重要な学会の議事録等を手がけております。又最近 Siemens より出版される出版物の英語版の出版権を獲得しましたので、以後、重要な出版物が Pitman の Imprint の下に、どしどし出版されると思われます。

現在、販売担当の重役は Mr. David Varley (12月再来日予定) で、小柄ながら非常にアイディアがあり、ファイトがあり歴史の古い Pitman に新風を注ぎ、彼の部下から重役陣から非常に期待されております。

この出版部門の本部のある Pitman House は Oxford Circus より徒歩で10分、Holborn 駅(地下鉄)より5分レンガ作りの古風な3階建のビルです。正門の回転扉を入るとすぐに創立者の胸像がありその奥は図書室兼 Showroom になっており、厚い絨毯を引きつめて、所々に木製の椅子が置かれ誰れでも自由に出入りし、どの本でも自由に読める様になっております。この The Pitman Group の出版部門の責任者は、Mr. David Dickens で彼の祖父は有名な Charles Dickens です。イギリスに行つての生家を見たい方は、彼に相談して下さい。喜んで案内してくれると思います。尚、Book Centre は Dickens Pitman 社の関連会社です。(市川記)

校部門、程度の高い専門書の部門と成人教育部門を加え、更に12年前から、ビジネス部門を加え、会社内教育や個人向の教育、訓練のための本を出してきた。一般書はこの後者の部門から出てきたものである。この部門責任者 Jack Howell らの言によれば、今後は一層書店で本を買うお客様とのコンタクトを強め、直接注文するよりも書店で買っていただけるようにしたい、とのことである。

(Publishers Weekly, 1973年9月10日号より)

——紀伊國屋書店提供——

ニュース

☆ 英国 William Dawson & Sons Ltd. の Director,
Mr. D. A. Brewer 8月下旬来日。

☆ 米国 Gordon and Breach Science Pub. Inc. の
Vice President, Dr. Edmund H. Immergut 9月
月上旬来日。

☆ 英国 William Dawson & Sons の Deputy
Manager, Back Issue Dept., Mr. Tom Hickey
9月上旬来日。

☆ 米国 Franklin Square Overseas Inc. の Mr.
F. Dixon Brooke, Jr. 及び Mrs. Dell S. Brooke
9月中旬来日。

☆ 米国 Litton Educational Publishing, Inc., の
Mr. R. S. R. Hutchison, Vice President. 9月
月中旬来日。

☆ 米国 University Park Press の President, Mr.
T. Rowland Slingsluff, Jr., 9月下旬来日。

☆ 独国 Verlag Chemic の Managing Director,

Mr. Kreuzhage 9月下旬来日。

★ 仏国 Department International Hachette の古
書部から Mr. François Ferran 及び François
Chamonal 9月下旬来日。

★ その他第22回 I. L. A. B. 大会には各国から約70
名の訪問者があった。

事務所移転ご案内

今般次の通知がありましたのでお手許の会員名簿の
訂正をお願い致します。

株式会社オリオンは赤坂営業所を下記に移転し、水
道橋営業所とよぶことになった。

千代田区神田神保町1-58 ハビロビル

電話 295-4008~9 (オリオン図書・輸出・輸入)

通 関 統 計

外国貿易概況 (大蔵省関税局編、日本関税協会発
行) 1973年月6月号所載。

書籍、新聞、雑誌の輸入額。

昭和48年6月 \$6,630,000 1月以降累計 \$30,988,000

昭和47年6月 \$6,176,000 \$27,960,000

(註) 此の統計は、C I F 価格で10万円以下の少額
貨物は含まれない

総代理店ご案内

次の通り日本総代理店の案内がございました。お
手許の Agent List にご記入願います。

(株) 丸 善 ☎ 272-7211
Spoken Arts Treasure of John F. Kennedy
Addresses. Ed. by A. L. Klein. Complete Text
with Preface by Robert F. Kennedy and with
Introduction to the Speeches by Prof. W. E.
Leuchtenberg. Complete set of 15 cassettes and
a book. (Spoken Arts/Toshiba Musical
Industries Ltd.) set ca ¥49,000
Le Disque Vert. Revue Mensuelle de Litterature.
Published by Editions Jacques Antoine. 4 tomes.
3,035 p. (Edition Chronique des Lettres Francaise,
Paris) ca ¥34,400
CRC Handbook of Materials Science. Ed. by Charles
T. Lynch. ca 600p. (CRC Press Inc., Cleveland)
ca ¥11,520

(株) マテマテイカ ☎ 814-9729
Van Nostrand Reinhold Mathematical Studies
(シリーズ全点、現在 No. 37 まで発行、以下続刊の予定)
発行所 Litton Educational Publishing
International, New York
※ 尚 No. 4, 9, 12, 20 は絶版でございます。

会 員 の 横 顔

ミロブックサービス

鈴木 富夫

カタカナの社名には
何かいwakがありそう
なので伺ってみました。建
築デザイン専門の洋書
取扱社としてスタート
する時、いろいろ考え
た筈句、美術に關係の
あるところで、あのヴ
イナスを出土したミロ



島の名をそのまま拝借することにした、というのは話
のオモテ。ウラ話は、男三人が集まって始めたのだから
三人の野郎たち、つまりミロという落ちがついてい
る。そんな話をして下さる鈴木さんは、昭和7年、逗
子の生れ。米軍PXの書籍・雑誌の購売部に勤務し、
現フェファ・アンド・サイモンズの牛尾さんを上司と
して、横文字の本とのつき合いを始めたというのだから、
お若い割にはその洋書経歴は大分古い。

PX時代に、どのようなロマンスが花開いたかは聞
き洩らしたが、同じ職場で結婚され、その奥様は現在
社業の方でも鈴木さんの片腕となっていてられる。7年
前に会社を創立した時の同志堀井専務と、奥様の尽力
がなかったら今日のミロブックスはなかったでしょ
う、と若い社長さんの話はなかなか社業から離れない。

趣味は若い頃(?)は野球と水泳が好きで、特に泳
ぎは海浜育ちだけに得意だったらしい。「逗子から築
港の辺までよく泳いで往復しました」というので、築
港とはどこかと伺ったら、ヨットハーバーのある鰐摺
(アブズリ)のことと判った。あの辺は取材子にとっ
てもなつかしい所で、戦後の一時期、友人等とヨット
に凝った時の根拠地である。「太陽の季節」などとい
う小説がまだ世に出る前で、ハーバーも今とは比較に
ならない程空いていた。傍目からみると恰好の良いヨ
ットも、自分で操る段になると決して楽なものではな
く、マストのたて方、ロープの結び方等々の基礎作業
を覚えるのも容易ではなかった事を思い出す。そんな
話をしていたら、鈴木さんも、「そういえば私も、友
達からボートを三千円で買って、鎌倉から逗子まで漕
いで来たことがあります。」というようなことになっ
て、漸く話が少しばかり浮世離れしてきた。

(自宅：茅ヶ崎市十間坂2-8-49)

米国フランクリン研究所 出版物ご案内

〈粉末冶金に関する抄録誌〉

Powder Metallurgy Science and Technology

月刊

年間購読料 ￥33,000

〈ウレタンに関する抄録誌〉

Urethan Abstracts

月刊

年間購読料 ￥19,980

〈オゾンに関する抄録誌〉

Ozone Chemistry and Technology

月2回刊

年間購読料 ￥46,250

〈粉末冶金に関する文献集〉

Powder Metallurgy Forging: A Process
Evaluation and Bibliography, 2nd ed.

1973年9月刊

￥4,000

〈交通に関する文献集〉

Transportation Bibliography

1968年刊

￥5,000

(Franklin Institute Research Laboratories, Philadelphia)

1974年版 医薬品便らん 1974 PDR

Physicians'
Desk Reference
to Pharmaceutical Specialities and Biologicals

1974年4月頃入荷予定 追補(A.B.C)とも 予定価￥6,560

この便らんは医薬品に関する最新の情報を収録したものです。各医薬品の効用、投薬、調剤、警告および副作用など、2000以上の医薬品についての正確な情報が記載されています。さらにその後の情報は季刊の追補として送られてきます。内容は Product Information Section, Product Identification Section, Alphabetical Index, Drug and Chemical Index, Drug Classification Index, Manufacturers' Index に分かれています。

(Medical Economics, Inc.)

日本総代理店



三洋出版貿易株式会社

本社 東京都中央区日本橋茅場町1-5-10 Tel. (669)3761
営業所 大阪・京都・新居浜

昭和48年10月 通巻第78号 洋書輸入協会 編集者 寺久保一重
☎ 103 東京都中央区日本橋1丁目20番3号 藍沢ビル302号室 ☎ 271-6901
☎ 530 関西支部 大阪市北区芝田町28 第一山中ビル ☎ 371-5329